2021年5月

今の季節は、過ごしやすい気温で、晴れの日は外に出かけたくなりますね。ただ、昨年に続き、コロナウイルスの影響で、今年も外出が難しくなってしまいました。こんな時だからこそ、家でなにをしようかなぁって悩んでいる人がいたら、ぜひ本を読んでほしいと思います。

本を読むことに億劫と感じている人でも、今回ご紹介する本は読みやすいのでオススメです。**『クマは「クマッ」となく？！』熊谷さとし著 偕成社 2005**です。おそらく、ほとんどの人がクマの鳴き声を実際に聞いたことがないのではないでしょうか？インパクトなタイトルに、「うそ～！？」と思い、この本を手に取り読みました。著者は、20年ほど前に図書館で見つけた秋田の猟師が書いた本（タイトルはわからないそう）や、ツキノワグマ研究者の米田一彦の名著『クマを追う』（こうぶつ社刊）に「クマッ」と鳴くという記述があったことを紹介しています。また、著者自身も実際に「クマッ」のような発音を聞いたそうです。著者が子グマに遭遇した際、子グマは母グマを呼んだのですが、その声が「クマッ、クマッ！」（発音の読みで表現すれば「KMACK！」のK、つまり「ク」が小さく「クマック！」という感じだったそう）です。実際に鳴き声を聞こうと思うと、クマにあわなければならないので、自分で確かめるのは難しいですよね。クマが「クマッ」って鳴いていたら、クマに対して、少し親近感を感じてしまうのは私だけでしょうか。

またこの本は、「クマは「クマッ」となく？！」だけでなく、テーマが44編あり、どれも面白く興味をそそるものばかりです。ホッキョクグマ（シロクマ）の毛は、本当は白いわけではなく透明だということ。毛の芯の部分が光に反射して、白く見えるのだそうです。他には、目が縦長・横長・まん丸の法則や体の模様（カムフラージュ）の法則、唇がない鳥の「口蓋音(こうがいおん)」と哺乳類にしか出せない「唇音(しんおん)」の解説もおもしろいです。「口蓋音」とは上あごに力を入れるカ行の音のことで、「唇音」とはマ行など上下の唇をくっつけないと発音できない音のことです。例えば、鳥がカァカァ・カッコウ・クック・コケコッコーと鳴くのに対し、哺乳類のミャーミャー・メェ～メェ～・モーモーなど……そしてこの章でも、上記でお話した子グマが母グマを呼んだ際の声についても触れていました。「ンンンッ…マッ！」だったのかもしれないと。

あと、個人的には石膏デッサンのとり方が図とともに説明されていて、おもしろいと感じました。資料集とか教科書で足形を見たことがありますが、こんな手順で作られていたのかと見入ってしまいます。正直、おもしろい章はまだまだ他にもあります。むかし話の「浦島太郎」の亀が主人公だったかもしれないこと、「桃太郎」に登場する動物と方位学の関係性、ホタルのすごさなど、著者の見解がうなずけるものも多くユニークで本当におもしろいです。

著者の「人間は地球や自然に対してとりかえしのつかないようなこともしてきたけれど、わずか100年でこんなにもすばらしいことができたのだ。だからぼくは、人間の持っている英知、行動力、正義が、自然回復に対して使われることを信じたい。」とおっしゃっていた言葉は、実に重要なことだと感じます。環境は人間次第で変えられると思っています環境によって奪われていく動物の命があることを思うと、私たち人間一人一人の行動が今問われていると思います。そして、研究や開発が命を奪うものではなく、平和に使われることを願います。